

令和4年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第3号（7月予報）

令和4年6月28日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は7月を主とします。次回の発表は令和4年7月29日の予定です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。 最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	<p>葉いもちの全般発生開始期はやや早い、発生量はやや多いと予想されます。余り苗は直ちに処分し、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は速やかに防除してください。</p> <p>斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）の発生時期は早く、発生量はやや多いと予想されます。水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されるため、中・後期剤の使用にあたっては、ほ場の発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択してください。</p>
野 菜 花 き	<p>野菜の病害では、きゅうりのべと病、うどんこ病がやや多い、斑点細菌病が多いと予想されます。降雨が続く場合や、病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くしてください。</p> <p>害虫では、ねぎ（夏どり）のアザミウマ類、キャベツ（夏どり）のコナガ、モンシロチョウ、ヨトウガがやや多い、トマトのアザミウマ類が多いと予想されます。多発すると効果が劣るので発生初期から薬剤散布してください。</p> <p>きくのアザミウマ類の発生量は多いと予想されます。ほ場を観察して、発生が見られたら薬剤の茎葉散布を実施し、密度の低下を図ってください。</p>
果 樹	<p>りんごとなしでは、果樹カメムシ類の発生がやや多いと予想されます。園地への飛来状況をよく観察し、飛来数が多い場合にはネオニコチノイド剤などの薬剤を散布してください。</p> <p>ぶどうでは、チャノキイロアザミウマの発生がやや多いと予想されます。発生が多い場合は合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤を散布し、防除を徹底してください。</p>

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	葉いもち	全県	やや早い	少ない	やや多い
	紋枯病	全県	やや早い	—	少ない
	稲こうじ病	全県	やや早い	—	やや少ない
	セジロウンカ (第1世代幼虫)	全県	早い	多い	多い
	斑点米カメムシ類(第1世代成虫) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	早い 早い	やや多い 平年並	やや多い 平年並
	コバネイナゴ	全県	—	—	やや多い
	アワヨトウ(第1世代幼虫)	全県	—	—	平年並
大 豆	ウコンノメイガ	全県	早い	—	平年並
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	平年並
ねぎ (夏どり)	さび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	べと病	全県	—	平年並	平年並
	アザミウマ類(ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
きゅうり	べと病	全県	—	多い	やや多い
	うどんこ病	全県	—	平年並	やや多い
	斑点細菌病	全県	—	多い	多い
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	やや少ない	平年並
キャベツ (初夏どり)	コナガ	全県	—	平年並	やや多い
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	やや多い
	ヨトウガ (第1世代)	全県	—	平年並	やや多い
トマト	灰色かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	葉かび病	全県	—	平年並	平年並
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	全県	—	多い	多い
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	平年並	平年並
きく	白さび病	全県	—	やや多い	やや多い
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	平年並	やや多い
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ)	全県	—	多い	多い
りんどう	葉枯病	全県	—	平年並	平年並
	リンドウホソハマキ	全県	—	やや少ない	平年並
	ハダニ類	全県	—	やや少ない	平年並
野菜・花 き共通	オオタバコガ	全県	—	平年並	やや多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや多い	やや多い
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	—	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	平年並	平年並
	ナミハダニ	全県	—	やや少ない	平年並
	リンゴハダニ	全県	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	全県	—	平年並	やや多い
	キンモンホソガ (第2世代)	全県	平年並	やや少ない	やや少ない
なし (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	アブラムシ類 (ユキヤナギアブラムシ)	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
ぶどう	べと病	県南部	平年並	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	やや少ない	やや少ない
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	平年並	やや多い
	クビアカスカシバ	県南部	—	平年並	平年並
飼料作物	アワヨトウ (第1世代幼虫)	全県	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予 報 内 容	
	発生時期（全般発生開始期）	発生量
1. 葉いもち	やや早い（前年並）	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/+）。
- イ、BLASTAM法による感染好適判定（県内24アメダス地点）では、6月26日までに全県的な全般発生をもたらす感染好適な気象は訪れていない（±/±）。
- ウ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月24日現在のあきたこまちの葉数は8.6葉（平年差-0.1葉）、草丈は32.6cm（平年比88%）、m²当たり茎数314本（平年比75%）だった（ /+）。
- エ、6月4～5半旬の余り苗調査における発病地点率は、県北部0%（平年6.3%）で低い、県中央0%（平年7.5%）でやや低い、県南部0%（平年3.4%）で低い、全県平均は0%（平年6.0%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意する。
- イ、余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。余り苗で発病が確認された場合、発病ほ場及び周辺ほ場では今後の発病状況に注意する。
- ウ、これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、又はルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。
- エ、余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤又はノンブラス剤の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病虫害名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	やや早い（前年よりやや早い）	少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。
- イ、前年収穫期の発生量はやや少なかった（ /-）。
- ウ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月24日現在のあきたこまちの葉数は8.6葉（平年差-0.1葉）、茎数はm²当たり314本（平年比75%）だった（±/-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。
- イ、粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。
- ウ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 稲こうじ病	やや早い (－)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (－/±)。

イ、各地域振興局の水稻定点調査によると、6月24日現在のあきたこまちの葉数は8.6葉 (平年差－0.1葉) だった (±/)。

ウ、前年収穫期の発生量はやや少なかった (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。

イ、ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。

ウ、Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に散布する。

エ、粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. セジロウンカ (第1世代幼虫)	早い (－)	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (－/)。

イ、秋田市予察ほのネットトラップ調査での初確認日は6月24日 (平年7月14日) で早かった (－/)。

ウ、秋田市予察ほのすくい取り調査での初確認日は6月27日 (平年7月2日) でやや早かった (－/)。

エ、6月27日の秋田市予察ほのすくい取り調査における成虫数は27頭 (6月6半旬の平年値は3.5頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除適期は成虫飛来盛期の約3週間後であり、要防除密度は1株に中老齢幼虫が15頭以上 (粘着板法4株叩き式では幼虫が35頭以上) である。

イ、今後飛来量が増加する可能性があるため、ほ場の発生状況を観察し、予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ) (第1世代成虫)	早い(前年並) 早い(前年並)	やや多い(前年よりやや少ない) 平年並(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (－/±)。

イ、牧草地のすくい取り調査における越冬世代成虫の初確認日は、アカスジカスミカメで6月2日

(平成6月12日)、アカヒゲホソミドリカスミカメで5月20日(平成5月31日)といずれも早かった(-/)。

ウ、各予察灯(6地点)における6月4半旬までの総誘殺数はアカスジカスミカメでやや多く(/+)、アカヒゲホソミドリカスミカメで平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長される。そのため中・後期除草剤の使用にあたっては、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択する。

イ、稲の出穂15~10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に数回行う。

ウ、水田畦畔刈り込み代用剤を7月上~中旬に散布すると40~50日の抑草効果が期待できる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. コバネイナゴ	—	やや多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(/+)。

イ、前年乳熟期の発生量から、越冬量は平年並と推定される(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、要防除密度は株当たり0.5頭以上(穂ばらみ期まで)であり、これは本田における20回のすくい取りで100頭以上に相当する。

イ、要防除密度に達したほ場では、若中齢期の7月上~下旬にトレボン剤又はMR、ジョーカー剤で畦畔を含めて防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. アワヨトウ(第1世代幼虫)	—	平年並(-)

(1) 予報の根拠

ア、6月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は平年並だった(N 飼料作物の項を参照)(/±)。

イ、6月4~5半旬の牧草地等巡回調査における第1世代幼虫の発生量は平年並だった(N 飼料作物の項を参照)(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は主にイネ科作物に被害を及ぼすため、小麦、牧草地等からの幼虫の移動、加害に注意する。特に、中干し時は水田内に侵入しやすいので、畦畔、農道法面の雑草に発生が見られたら湛水状態を保ち、侵入を防ぐ。また、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合は、直ちにスミチオン乳剤又はスミチオン粉剤3DLで防除する。

イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
褐色菌核病	—	—	やや少ない	前年収穫期の発生量はやや少なかった。 紋枯病との同時防除とする（モンセレン剤を除く）。
ニカメイガ (2回発生地帯の 第1世代)	—	多い	多い	各予察灯（6地点）における越冬世代成虫の総誘殺数（5月1半旬～6月4半旬）は19頭（平年7.8頭）で多かったが、防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ (第1世代)	—	—	平年並	6月26日現在、飛来は確認されていない。 今後の予察情報に注意する。
フタオビコヤガ (イネアオムシ) (第2世代)	—	やや少ない	やや少ない	抽出ほ場調査（6月2～3半旬）における第1世代幼虫の発生量はやや少なかった。 防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

B 大豆

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ウコンノメイガ	早い（前年並）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（- / ±）。
イ、五城目町予察灯において、6月15日（平年6月30日）に誘殺が確認された（- / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、生育が旺盛なほ場で多発する傾向があるので注意する。
イ、7月6半旬にほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合には、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソンプロアブル5のいずれかを散布する。
ウ、発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が主であり、急激に発生量が増加する場合がありますので、今後の予察情報に注意する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 食葉性鱗翅目幼虫	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ / ±）。
イ、6月中旬のえだまめの巡回調査における発生茎率は8.0%（平年7.9%）で平年並だった（ / ±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. さび病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年1.1%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早まるので、予防や発病初期の防除に努める。
- イ、発病が多くなってからでは防除効果が劣るため、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（RACコード：3）、カナメフロアブル（RACコード：7）等を散布する。ただし、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる葉害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とる。
- ウ、RACコードが3、7、11の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. べと病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0.5%（平年2.1%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早い。定期的に、ジマンダイセン水和剤（RACコード：M3）等を散布し、予防に努める。
- イ、発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：49・30）、ザンプロDMフロアブル（RACコード：45・40）、リドミルゴールドMZ（RACコード：4・M3）等を散布する。
- ウ、RACコードが4、11、27、40、45、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	—	やや多い （前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は7.2%（平年8.8%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（RACコード：4A）、グレーシア乳剤（RACコード：30）、ダントツ水溶剤（RACコード：4A）、ディアナSC（RACコード：5）、ファインセーブフロアブル（RACコード：34）、ベネビアOD（RACコード：28）等を茎葉

散布、又はダントツ粒剤（RACコード：4A）、プリロッソ粒剤（RACコード：28）、ミネクトデュオ粒剤（RACコード：28・4A）を株元散布する。
 イ、薬剤感受性の低下を回避するため、RACコードが同じ薬剤の連用は避ける。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. ネギハモグリバエ	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
 イ、6月4半旬の巡回調査における食害株率は1.7%（平年10.6%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。アグロスリン乳剤、グレーシア乳剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、ベネビアOD等を茎葉散布、又はダントツ粒剤、プリロッソ粒剤、ミネクトデュオ粒剤を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。
 イ、薬剤感受性の低下を回避するため、RACコードが同じ薬剤の連用は避ける。

5. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
アブラムシ類 （ネギアブラムシ）	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

D きゅうり

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
 イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は2.0%（平年0.7%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、敷きわら等を行い、雨による土のはね上がりを防ぐ。
 イ、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。
 ウ、定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
 エ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル（RACコード：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（RACコード：27・40）、ホライズンドライフフロアブル（RACコード：27・11）、リドミルゴールドMZ（RACコード：4・M3）等の治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。
 オ、RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン剤 (RACコード: 3)、パルミノ (RACコード: M10)、ポリオキシシAL水和剤 (RACコード: 19)、ポリベリン水和剤 (RACコード: 19・M7) 等の治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 斑点細菌病	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月4半旬の巡回調査における発病株率は6.8% (平年1.6%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、強風等により傷が付くと感染しやすくなるので防風対策を講じる。

イ、過剰施肥をしない。また、過繁茂による通風しの不良を改善する。

ウ、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

エ、銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。

オ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	平年並 (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月4半旬の巡回調査における発生株率は9.8% (平年15.9%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場周辺の除草を徹底する。

イ、定期的に薬剤を散布する。ただし、薬剤抵抗性の発達を回避するため、RACコードが同じ薬剤の連用は避ける。

ウ、ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

E キャベツ（初夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. コナガ	－	やや多い（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は216頭（平年150頭）でやや多かった（ /+）。

ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.04頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫が見られる場合は、アファーム乳剤、グレーシア乳剤、コテツフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5等を散布する。

イ、同一系統薬剤を連用しないことと収穫前日数に注意して薬剤を選定する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モンシロチョウ	－	やや多い（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヨトウガ（第1世代）	－	やや多い（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップの誘殺数は2頭（平年2.4頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、6月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除とする。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	－	やや少ない(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0.6%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ロブラール水和剤（RACコード：2）、ベルコート水和剤（RACコード：M7）などで予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、同一のRACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 葉かび病	—	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（RACコード：M5）、ベルコート水和剤（RACコード：M7）などで予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	—	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、北秋田市防除適期決定ほにおける6月3～4半旬の青色粘着板への誘殺数は191頭（平年39頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ、急増期（青色粘着板での10日当たり誘殺数がおおむね50頭/250cm²以上、かつ、誘殺数が前回誘殺数のおおむね5倍以上）がすでに確認されているため、直ちに防除を開始する。
- ウ、ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（RACコード：5）、マッチ乳剤（RACコード：15）などを花房に付着するように丁寧に散布する。ただし、抵抗性の発達を回避するため、同一のRACコードの薬剤は連用しない。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 食葉性鱗翅目幼虫	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は8.0% (平年7.9%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期 (若齢期) にアディオソ乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

H きく

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 白さび病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.8% (平年0%) で本年初めて確認された (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病葉は摘み取り、ほ場外で処分する。
- イ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。
- イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は4.8% (平年5.8%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
- イ、ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するため、発生初期の防除を徹底する。
- ウ、薬剤抵抗性の発達を回避するため、RACコードが異なる薬剤をローテーション散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) (ミカンキイロアザミウマ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は0.8% (平年0.2%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。

イ、発生が見られたらグレーシア乳剤等の茎葉散布を実施し、密度の低下を図る。

I りんどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 葉枯病	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6月中旬の巡回調査における発病茎率は6.1% (平年7.2%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、過繁茂を避ける。

イ、オンリーワンフロアブル、ベフラン液剤25等の薬剤で防除するが、花の汚れを避けるためにオーソサイド水和剤80やZボルドーは着蕾期以降に使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. リンドウホソハマキ	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における被害茎率は0.2% (平年1.2%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害を見つけたら折り取り、土中に埋めるなど適切に処分する。

イ、ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、アディオフロアブル、ディアナSC、フェニックス顆粒水和剤等の薬剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ハダニ類	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発生茎率は0.8%（平年3.2%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、カネマイトフロアブル、コロマイト水和剤、バロックフロアブル等の薬剤で防除するが、マイトコーネフロアブルの使用時期は開花前までである。

J 野菜・花き共通

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. オオタバコガ	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）
- イ、秋田市防除適期決定ほにおける6月1～4半月のフェロモントラップへの総誘殺数は1頭（平年1.6頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、例年8月以降に被害が多くなるが、近年は、被害発生時期が早い傾向にあるので、発生初期の防除に努める。

K りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 斑点落葉病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.1%（平年0.0%）でやや高く、発病地点率は13.6%（平年11.9%）で平年並だった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）、ロブラール水和剤（RACコード：2）のいずれかを主剤に加用して使用する。また、これらの薬剤は年1回の使用とする。ただし、ポリオキシシAL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。
- エ、ベフキノン水和剤、ベフラン液剤25は、千秋、玉林で果実色に障害が生じるおそれがあるので、7月中旬以降に使用する。
- オ、パスポート顆粒水和剤は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は使用時期に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病果そう率は0.1%（平年1.2%）でやや低く、発病地点率は4.5%（平年11.4%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉、発病果実は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、黒星病の発生園では、Q o I 剤（RACコード：11）の使用を中止し、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。

エ、黒星病の未発生園では、Q o I 剤を使用できるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤（ベルケート水和剤、有機銅剤等）を加用する。また、耐性菌出現を回避するため、年2回以内の使用を厳守する。

オ、パスポート顆粒水和剤は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は使用時期に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、ニセアカシアは伝染源となるので、園地の近くにある木は伐採する。

ウ、被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

エ、パスポート顆粒水和剤は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は使用時期に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 輪紋病	—	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する（塗布は3回以内）。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、パスポート顆粒水和剤は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は使用時期に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.1%（平年0%）、発病地点率は4.5%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、多発が予想される場合は、7月中～下旬にトップジンM水和剤（RACコード：1）、ベンレート水和剤（RACコード：1）のいずれかを散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌の出現を回避するため、年1～2回の使用とし、必ず保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80（RACコード：M4）、有機銅剤（RACコード：M1）など）を加用する。これらの効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）に保護殺菌剤を加用して散布する。

ウ、パスポート顆粒水和剤は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は使用時期に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は109頭（平年99頭）で平年並だった（ /±）。

イ、果樹試験場の予察ほにおける6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は25頭（平年26.4頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤を使用する場合の散布適期は、県北部が7月上～中旬、県中央部・県南部では7月上旬まで（未散布園の場合）とする。

ウ、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるので、高温時や衰弱樹には散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭（平年0.0頭）でやや少なく、発生地点率は0%（平年8.3%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点
が同一の剤は年1回までの使用とする。

ウ、ダニオーテフロアブル（RACコード：未）を使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、
銅剤（銅を含む製剤）を使用しない。

エ、エコマイト顆粒水和剤（RACコード：23）の適用作物はりんごとおうとうのみなので、これ
ら以外の果樹類に薬液がかからないようにする。また、ダニゲッターフロアブルは、同一のRAC
コードのため注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
8. リンゴハダニ	—	やや多い（前年よりやや少ない）

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭（平年0頭）、発生地点率は0%（平
年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7. ナミハダニの項を参照する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
9. 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ） （チャバネアオカメムシ）	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹
カメムシ類の総誘殺数は154頭（平年206頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来
状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水
溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤のいずれかを散布する。

ウ、スミチオン水和剤40は、薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるので、高温時や衰弱樹には
散布しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
10. キンモンホソガ （第2世代）	平年並 （前年よりやや遅い）	やや少ない （前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、横手市予察ほのフェロモントラップにおける第1世代成虫の誘殺盛期は6月4半旬（平年6月

4 半旬) で平年並だった (±/)。

イ、6 月中旬の巡回調査における食害葉率は0.0% (平年0.1%) で低く、食害地点率は9.1% (平年20.1%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除適期は県北部で7月3～4 半旬、県中央部・県南部は7月2～3 半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類	早い	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

L なし (日本なし)

病害虫名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
1. 黒星病	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6 月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.02% (平年0.05%)、新梢葉の発病葉率は0% (平年0.01%) でいずれも平年並、発病果率は0% (平年0.05%) でやや低かった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害部位は除去し、園外へ搬出し処分する。

イ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。幸水は本病に弱いので特に注意して防除する。

ウ、有袋栽培の場合は、散布した防除剤が乾いたら速やかに袋かけを行う。

病害虫名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
2. 黒斑病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1 か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、6 月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.49% (平年0.84%)、発病果率は0.11% (平年0.07%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲に発病が多い。

イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は被害が発生している園地では散布間隔を7日とする。

エ、多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤 (RACコード:19) を主剤に加用するか、ベルクガード水和剤 (RACコード:M7・M3) 又はポリキャプタン水和剤 (RACコード:19・M4) を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシシン剤の使用回数は年間3回以内とする。

オ、袋かけ前の防除を徹底し、散布した防除剤が乾いたら速やかに袋かけを行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 輪紋病	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する (塗布は年3回以内)。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。高温、多雨の場合は散布期間を短くする (7日間隔程度)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、防除適期決定ほ4地点における6月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は20頭 (平年55.7頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、合成ピレスロイド剤で防除する場合、県中央部の未散布園では7月上旬までに、県北部では7月上～中旬に実施する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない (葉裏に黒色斑)。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤のため、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0頭 (平年0.01頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、焼却する。

イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は、1薬剤年1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の剤は、年1回の使用として効力低下を防ぐ。

エ、ダニオーテフロアブル (RACコード:未) を使用する園では、オキシラン水和剤 (RACコ

ード：M4・M1）などの銅を含む製剤を使用しない（銅剤と混用及び近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、防除適期決定ほにおける6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップの果樹カメムシ類の総誘殺数は88頭（元年124頭）で元年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

ウ、アルバリン顆粒水和剤とスタークル顆粒水和剤は同一成分の薬剤のため、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. アブラムシ類 (ユキヤナギアブラムシ)	—	元年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、6月中旬の巡回調査における発生新梢率は0.6%（元年1.8%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ネオニコチノイド剤等によりシンクイムシ類及び果樹カメムシ類との同時防除に努める。

8. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	元年並	元年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

M ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期 (初発)	発 生 量
1. べと病	元年並 (前年より遅い)	元年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ元年並と予報されている（ ±/±）。

イ、6月中旬の巡回調査において、巨峰とシャインマスカットの発病葉率及び発病花穂率は0%（ \pm ）でいずれも \pm 並だった（ \pm ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、予察ほにおける葉での \pm 年の初発確認日は7月23日である。

イ、発病が見られる場合は、7月中旬までに袋かけを行い、袋かけ後直ちに薬剤を散布する。

ウ、薬剤は、エトフィンフロアブル（RACコード：22）、ジャストフィットフロアブル（RACコード：43・40）、フェスティバル水和剤（RACコード：40）、ベトファイター顆粒水和剤（RACコード：27・40）、ホライズンドライフロアブル（RACコード：27・11）、ライメイフロアブル、ランマンフロアブル（RACコード：21）、レーバスフロアブル（RACコード：40）、銅剤（コサイド3000、ムッシュボルドーDF、ICボルドー66D、Zボルドー等）（RACコード：M1）又は4-4式ボルドー液のいずれかを散布する。

エ、ホライズンドライフロアブルは果粒が小豆大以降、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル及びランマンフロアブルは大豆大以降の散布で、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、散布時期に注意する。なお、ボルドー剤（ムッシュボルドーDF、Zボルドー等）は袋かけ後に使用する。

オ、ムッシュボルドーDF、Zボルドー及びコサイド3000は、薬害（落葉）のおそれがあるので、クレフノン100倍を必ず加用する。

カ、QoI剤（RACコード：11）、QiI剤（RACコード：21）、カルボン酸アミド剤（RACコード：40）又はシモキサニル（RACコード：27）を含む農薬及びエトフィンフロアブルは年間1~2回の使用とし、同じRACコードの薬剤を連用しない。

キ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 灰色かび病	-	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ \pm 年並と予報されている（ \pm ）。

イ、6月中旬の巡回調査における発病葉率は、キャンベル・アーリーが0%（ \pm 年0.1%）、巨峰が0%（ \pm 年0.1%）、シャインマスカットが0%（ \pm 年0.0%）でいずれもやや低かった（ \pm ）。発病花穂率は、キャンベル・アーリーが0%（ \pm 年0.1%）、巨峰が0%（ \pm 年0.2%）でいずれもやや低く、シャインマスカットが0%（ \pm 年0%）で \pm 年並だった（ \pm ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、花冠や不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるため、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。

イ、発病果房のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため焼却する。

ウ、薬剤は、オーソサイド水和剤80（RACコード：M4）、オンリーワンフロアブル（RACコード：3）、パスワード顆粒水和剤（RACコード：17）、ピクシオDF（RACコード：17）、ポリオキシシAL水溶剤（RACコード：19）又はポリベリン水和剤（RACコード：19・M7）のいずれかとする。ただし、ポリオキシシAL水溶剤及びポリベリン水和剤の使用時期は収穫60日前まで、オーソサイド水和剤80は収穫30日前まで、パスワード顆粒水和剤は収穫14日前までであるため、散布時期に注意する。また、オンリーワンフロアブルの使用は7月中旬までとする。

エ、上記薬剤のうちオーソサイド水和剤80以外の薬剤は、耐性菌出現回避のため、いずれも年間使用回数を1回とする。また、同じRACコードの薬剤の連用を避ける。

オ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 晩腐病	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、開花期巡回調査におけるキャンベル・アーリー、巨峰、シャインマスカットの発病花穂率は、いずれも0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病果房は摘み取り、焼却する。

イ、薬剤は、オーソサイド水和剤80 (RACコード:M4) 1,000倍液又はオンリーワンフロアブル (RACコード:3) とする。ただし、オーソサイド水和剤80の使用時期は収穫30日前までなので、散布時期に注意する。

ウ、笠かけや袋かけは薬剤の散布後7日以内に行い、7月中旬までには終える。やむを得ず7日以上空ける場合は、笠かけや袋かけの前に追加散布をする。

エ、耐性菌の出現を回避するため、オンリーワンフロアブルは年間使用回数を1~2回とし、連用を避ける。

オ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、6月中旬の巡回調査におけるキャンベル・アーリー、巨峰、シャインマスカットの食害花穂率は、いずれも0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い場合は、エクシレルSEやスカウトフロアブル、ダントツ水溶剤、テッパン液剤、ディアナWDG、バイスロイドEW、モスピラン顆粒水溶剤等を散布する。

イ、ダントツ水溶剤は小豆大期以降、テッパン液剤、モスピラン顆粒水溶剤、バイスロイドEW、ディアナWDGは大豆大期以降の散布で、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、その前あるいは袋かけ以降に散布する。また、エクシレルSEは果実に薬斑や果粉溶脱を生じさせるおそれがあるので、袋かけ以降に使用する。

ウ、袋かけ前の散布は果房への散布むらがないよう注意し、散布後は速やかに袋かけ作業を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. クビアカスカシバ	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

ア、防除適期決定ほにおける6月1~4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は152頭 (平年121頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、粗皮があると薬液散布や塗布の効果が劣るため、粗皮剥ぎを行ってから処理する。
- イ、幼虫の食入防止対策として、7月中旬頃にフェニックスフロアブル又はテッパン液剤を散布する。
- ウ、スピードスプレーヤで散布する場合は、枝幹に十分に薬液がかかるように散布するが、主幹基部は薬液がかかりにくいいため同日に補完散布を行う。ただし、既にガットサイドSを処理している樹では補完散布は必要ない。
- エ、薬剤散布後も幼虫の食入被害が見られる場合は、虫糞排出が認められる食入孔へロビンフッドを処理する。ロビンフッドを処理する際は、幼虫に薬液が到達するよう、虫糞を除去し粗皮を剥ぎ食入孔の向きを確認してから処理する。

N 飼料作物

病虫害名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
1. アワヨトウ（第1世代幼虫）	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、6月4半旬までの糖蜜トラップにおける総誘殺数は、能代市3頭（平年4.4頭）で平年並、由利本荘市1頭（平年1.5頭）で平年並、両地点の合計は4頭（平年6.3頭）で平年並だった（ /±）。
- イ、6月4～5半旬の牧草地等巡回調査における第1世代幼虫は0頭/m²（平年0.15頭/m²）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除を必要とする牧草地は少ないと見込まれるが、群生相となった黒化型の幼虫が確認された場合はスミチオン乳剤で防除する。牧草の刈り取りはスミチオン乳剤散布後14日以降に行う。
- イ、本種は突発的に発生することがあるので、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和4年6月23日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（6月25日～7月24日）

(1) 予報のポイント

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

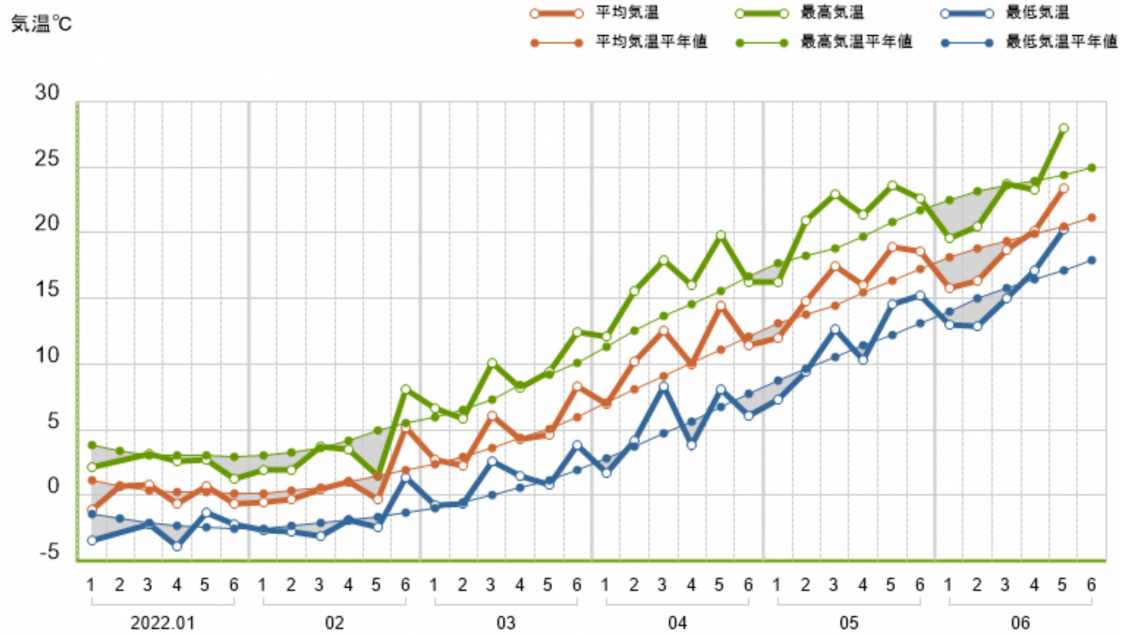
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	20%	70%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

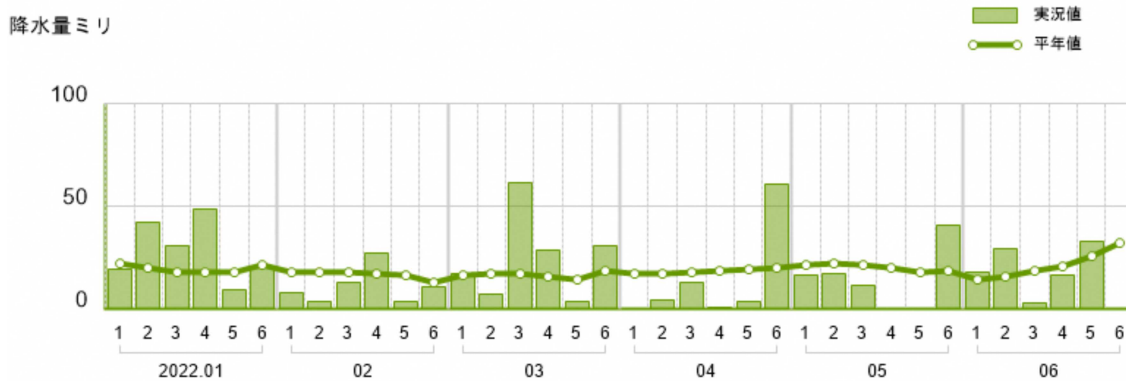
	低い	平年並	高い
6/25～7/1（1週目）	10%	10%	80%
7/2～8（2週目）	10%	40%	50%
7/9～22（3～4週目）	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～6月5半旬 秋田県農業気象システムより)

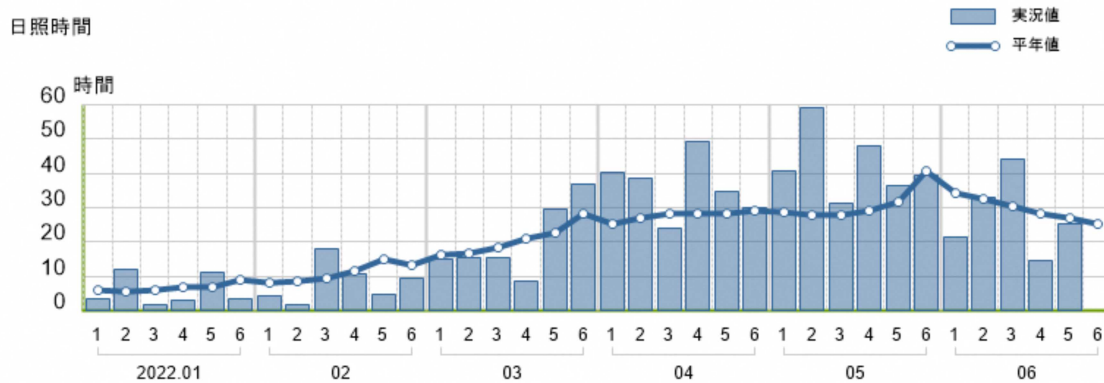
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

**令和4年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。